

叙事詩の宗教哲学
—— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XII) ——
茂木秀淳

〈Mokṣadharmā 和訳〉

[2 1 1 章] (=D. 2 1 8 章、7881-7929)

ユディシュティラは言った。

- (1) いかなる行為によって、行為を知りダルマを知る²ミティラーの王ジャナカは、もろもろの世間的楽しみ (bhogān mānuṣān) を捨てて、解脱に至ったのか。

ビーシュマは言った。

- (2) ここでも人は、この古譚を語る。いかなる行為によって、行為を知る³彼は大安楽に⁴至ったか (について)。
- (3) ミティラーの王であるジャナカ族のジャナデーヴァは⁵、死者を葬うもろもろの法の思索に集中していた⁶。
- (4) 彼の家には常に百人の師匠が住んでいた。彼等はそれぞれの教えを説き、種々の異端の説を⁷語った。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XI) —』(信州大学教育学部研究紀要第 94 号 1998 年 8 月)に続くものである。略号などは前稿に準ずる。新たな略号は以下のとおり。

[Dasgupta] Dasgupta, History of Indian Philosophy, 5vols.

[Bedekar 1957] Bedekar, V.M., Studies in Sāṃkhya: Pañcaśikha and Caraka, ABORI, 38, 1957, pp140-147.

[Bedekar 1957-2] Bedekar, V.M., Studies in Sāṃkhya: The Teachings of Pañcaśikha in the Mahābhārata, ABORI, 38, 1957, pp233-244.

[Bedekar 1961], Bedekar, V.M., The doctrines of Svabhāva and kāla in the Mahābhārata and other old Sanskrit works, Journal of the University of Poona, Humanities Section, pp.1-16.

[Chakravarti] Chakravarti, P., Origin and Development of the Sāṃkhya System of Thought, 1951, Calcutta (Reprint 1975 Delhi);

²P. dharmajño D. mokṣajño

³P. vṛttajñāḥ D. dharmajñāḥ

⁴mahatsukham Cp. sukhaṃ mokṣaṃ, mokṣasya brahmasukhātmatkātvāt / yo vai bhūmā tat sukham iti śruteḥ

⁵janadevas Cn. janakavaṃśyaḥ nāmnā jadevaḥ Cs. janadevanāmā /

⁶aurdhvadehikadharmānām cf. Manu. 11.10, Deussen: über die Pflichten hingeben, welche über die Körperlichkeit hinausführen

⁷P. nānāpāṣaṇḍavādināḥ D. nānāśramanivāsināḥ Ca., Cs.: pāṣaṇḍavāsināḥ pāṣaṇḍānām vāsanā ācchādakāḥ stambhakārāḥ / vasa ācchādane vasu stambhane dhātvoḥ / (Ca. yad vā niḥśreyasaṃ prati vimukhatvena pāṣaṇḍavāsanāvantaḥ / tathā ca pañcaśikhaścārvākabauddhān rājāsau pūrvapakṣakāriṇo manyate / Cn. pāṣaṇḍavāsina itī pāṭhe pāṣaṇḍān vāsayanti ācchādayanti tiraskurvanti te tathā /

- (5) 伝承聖典を重んじる彼は、死後の存在や死後の誕生についての彼らの断定 (viniścaya) について、さらにはアートマンの真理について⁸、満足することはなかった。
- (6) そこへ、カピラ姓の⁹パンチャシカという名の偉大な聖者が、全地上を廻りつつ¹⁰、ミティラーにもやって来た。
- (7) 彼は、あらゆる棄却の教義の¹¹真理の認識の定説に関して、その意味によく通曉し、(その認識に) 並ぶものなく、疑問を滅したる者である。
- (8) 人々は、彼を、聖仙の一人であり、人間における (nṛṣu) 欲望を終らせ¹²、得るの難しい究極恒常の安楽を求める者である、と言う。
- (9) 彼(パンチャシカ)は、私が思うに、サーンキヤの教義に従う人々が言う、最高の聖仙であり造物主であるカピラの姿によって、自ら人々を驚かしているのである。
- (10) アースリの第一の弟子である彼は、長命であり五種の流れの中で¹³、千年間サットラ祭を¹⁴行った、と言われている。
- (11) カピラの偉大な真理は¹⁵、座している彼に¹⁶近づき、人の姿をして¹⁷、未だ開示されていない最高の真実を示した¹⁸のである¹⁹。(cf.[Dasgupta] vol.1, I.Chap.VII. pp.216ff.; [Bedekar 1957] pp140-147; [Chakravarti] p.102.)
- (12) ソーマ祭によって²⁰完成し、タパスによってさらに高まった聖者 (muni)²¹は、田と

⁸ātmatattve Cs. ātmatattvaṃ svarahasyaṃ /

⁹kāpileyo Ganguli: the son of Kapila

¹⁰paridhāvan Cn. paridhāvan ekatra vāsam akurvan

¹¹sarvasannyāsadharmānām Ca. sarvasaṃnyāsāḥ vedasaṃnyāsāḥ, kāmyaniṣiddhasaṃnyāsāḥ, aurdhavadaiḥikavyatiriktakarmamātrasaṃnyāsās ceti prakārāḥ

¹²P. avasitaṃ D. anviechantāṃ Ca. kāmād avasitaṃ tyaktakāmam ity arthaḥ Cn. kāmād avasitaṃ iti pāṭhe yadr̥cchayā sthitam Cs. kāmāt sveccayā nṛṣv avasitaṃ manuṣyeṣṣitaṃ

¹³pañcasrotasi Ca.,Cs.: pañcasrotasi pañcanadīsaṃjñāo saṃgame Cn. pañcasrotāṃsi viṣayakedārapraṇālikā yasya tasmin manasi Cp.,Cs.: yad vā apāne prāṇaṃ, rāṇaṃ amanasi, mano buddhau, buddhiś ca prakṛtau, prakṛtiś ca puruṣe /

¹⁴satram (=satram) Cp. saṃtrāṇalakṣaṇatvāt satram

¹⁵kāpilaṃ maṇḍalaṃ Ca. kāpilaṃ kapilapraṇītaṃ jñānaṃ maṇḍalaṃ tejomaṇḍladhāritayā puruṣākṛtyā ... bodhayāmāsa /

¹⁶P. tam samāsīnam D. yatra cāsīnam 「彼」(tam) が指すのは、アースリカパンチャシカか判然としなない。第 10 詩節の関係代名詞 yam, yaḥ は内容的にパンチャシカを指しており、これとの対応で考えれば、「彼」はパンチャシカを指すと考えられる。ここではこのように理解した。しかし、第 13 詩節では、「カピラの真理において」(maṇḍale tasmin) 不変なものを理解するのはアースリとされている。また、『サーンキヤ・カーリカー』の伝える師々相承によれば、カピラの後継者はアースリであり、これに依って、「カピラの真理」の順次継承を考慮すれば、「彼」はアースリと考えることも可能である。

¹⁷puruṣāvastham Cp. puruṣāvasthṃ puruṣe avasthā avasthitir yasya maṇḍalasya / puruṣān na paraṃ kiṃcit sā kāsthā iti śruteḥ (Katha. Up. 1.3.11) /

¹⁸P. nibodhayat D. nyavedayat

¹⁹D. は P. の ab 句と cd 句の間に次の 2 行を挿入している。

pañcasrotasi niṣṇātaḥ pañcarātraviśāradaḥ /

pañcajñāḥ pañcakṛt pañcaśikhaḥ smṛtaḥ //

Hopkins はこの偈に基づいて、パンチャシカを Pañcarātra 派の論師であるとみなしている。([Hopkins Great Epic], p.144.27.)

²⁰iṣṭasattreṇa Cn. iṣṭasattreṇa ātmayajñena /

²¹muni が指すのは、アースリカパンチャシカかにはわかに判別できないが、前詩節の tam がパンチャシカを

知田者の相違を²²神の目によって (devadarśanaḥ) 悟ったのである。

- (13) 多様の姿をもって現れる唯一にして²³不滅のブラフマン、かの不動なるものを、アースリは彼の真理 (マンダラ) において²⁴理解したのである。
- (14) 彼の弟子パンチャシカは、人間の乳で養われた。家長 (アースリ) の妻にカピラーという名のあるバラモンの女がいた。
- (15) その女の息子となって、彼はその二つの乳房から乳を飲んだ。その後彼は、カピラ姓を得、そして確固とした認識 (naiṣṭikīm buddhim) を得たのである。
- (16) このように尊者は²⁵、カピラ姓の²⁶発生、彼 (パンチャシカ) がカピラ姓に属すること、彼が最高の一切知者であることについて、私に語ったのである。
- (17) カピラ (=パンチャシカ) は²⁷、ダルマの知識の中で²⁸共通にして²⁹この上なきものを認識して、(ジャナカのところにいる) 百人の師匠に近づいて、もろもろの議論によって悩ませた。
- (18) 一方 (tu)、ジャナカはカピラ姓をもつ者を見て、心を強くひきつけられ、百人の師匠を追い出し、彼に従った。
- (19) よく (心の) 準備が整い³⁰、ダルマに従って敬礼する彼のために、(パンチャシカは、) サーンキヤとして規定されている (?)³¹最高の解脱を語った。
- (20) 種姓 (あるいは誕生) の厭離 (jāti-nirveda) を語った後、彼は行為の厭離 (karmānirveda) を語った。行為の厭離を語った後、一切に対する厭離を語った。([Bedekar 1957] p.141)
- (21) あるものを目的として行為 (祭式) が行なわれ³²、そして行為の結果が生起するよ
うなものは³³虚しく、信頼に値せず (anāśvāsika)、滅し、動揺する無常のものである。

指すとすれば、パンチャシカを指すと思われる。ただし、次の詩節と関連して考えれば、アースリを指すとも理解でき、Ganguli, Deussen, Dutt もそのように解している。しかし、その場合、内容的な問題が生じる。すなわち、アースリは、第 12 詩節の「田と知田者の相違」を知る者であり、第 13 詩節の「多様に顕現する唯一のブラフマン」を理解する者でなければならぬが、内容的に両者は同一の者と考えられるであろうか。このような不鮮明さは、14 詩節以降の「パンチャシカのカピラ姓伝説」の導入に際し、アースリに言及する必要が生じ、アースリにサーンキヤ説を帰したために生じたものであろう。

²²vyaktim Cs. vyaktim vivekadarśanam iti yāvat

²³ekākṣaram Cs. ekam avṛttiviśayam, advayam avikāram /

²⁴maṇḍale Cp. maṇḍale śāstre

²⁵bhagavān Ca., Cn., Cp., Cs.: bhagavān mārkaṇḍeyaḥ sanat Kumāro vā

²⁶P. kāpileyāya D. kāpileyasya Ca., Cp.: kāpileyāyeti śaṣṭyartho caturthī

²⁷P. kapilo D. janakam

²⁸P. dharmajñānām anuttamam D. dhamajño jñānam uttamam

²⁹sāmānyam Cn. sāmānyam sarveṣv ācāryeṣu samabuddhim /

³⁰paramakalyāya Ca. paramakalyāya dṛḍhāya Cn. samarthāya

³¹P. yat tat sāmṅhyam vidhīyate D. yat tat sāmṅhye vidhīyate Cn. sāmṅhye upaniṣatkāṇḍe / vidhīyate apūrvatayā jñāpyate, na tu yuktyā unnīyate

³²P. karmasamsargaḥ D. dharmā-

³³P. tad D. tam Cn. tam moham abravīd iti pūrveṅnavayaḥ

- (22) 眼のあたりに見えるものは滅すると世間の人が目撃しているのに、伝承によって「すぐれたものは存在する」と語ったとしても、(その人は)打ち負かされるであろう³⁴。
- (23) 無我とはアートマンの死であり、死と老いと病気は苦痛 (kleśa) である。迷妄のためにアートマン (の恒久的存在?) を考えるならば、それはもっぱら正しくない考えである。
- (24) しかしそうであっても、世間では生じないものも存在するではないか。たとえば³⁵「この王には老もなく死もない」と考えられるように。
- (25) (いやそもそも、あるものが) 存在するのか、存在しないのか³⁶、ということも、その (存在するという) 目印が存在しない時に生じるのである。何に基づいて、人は、世間の出来事の決定を語るのであろうか。(目に見えるものに基づいてであろう。)
- (26) この (存在するしないという) 両者の³⁷ 根本は直接知覚である。推論と伝承 (の根本) も³⁸ 直接知覚である。伝承は直接知覚と異ならず³⁹、推論は意味なきものである。
- (27) 推論において (あるものが) 存在する、と証明される時は常に、作られたものが証明されているのである⁴⁰。(しかし、) 靈魂 (jīva) は (作られたものである) 身体とは異なる⁴¹、と無神論者の教義には (nāstikānām mate) 伝えられている (cf. Johnston p.45)
- (28) いちじくの木の小片の中における精髓 (retas)、料理という行為におけるグリタ (? ghr̥tapākādhivāsanam)、誕生の記憶⁴²、磁石、日長石、(火や砂などの) 水を吸収するもの⁴³(は、靈魂が身体に他ならないことを示す例である)。

³⁴bruvann api parājitaḥ Cs. na hi parājitaḥ sādhu paśyatiṭy arthaḥ

³⁵P. tathā D. yathā Cn. yathā rājño 'jaratvāmaratvādyāśir upacāra evaṃ dṛṣṭasukhe eva svargopacārah

³⁶asti nāsti Cp. asti nāstīti lakṣyate / kākvanety arthaḥ

³⁷etaryor Ca. etayoḥ astināstipadayoḥ

³⁸kṛtāntaitthyayoḥ N. kṛtāntaitthyayoḥ anumānāgayoḥ Monier は、kṛtānta の訳語として a conclusion を示し、この箇所と言及している。

³⁹P. pratyakṣo hy āgamo 'bhinnah D. pratyakṣeṇāgamo bhinnah abhinnah という読みは妥当か。D. は bhinnah と読み、N. は、bhinnah を bādhitā と注釈している。伝承を否定するならば、bhinna と読んで、直接知覚と対立するので信頼できないとした方がよいのではないか。あるいは、異なるので、一方は無意味と考えるか。

⁴⁰P. yatra tatrānumāne 'sti kṛtaṃ bhāvayate 'pi vā D. yatra yatrānumāne 'smin kṛtaṃ bhāvayate 'pi ca Cn. bhāvayataḥ kṛtaṃ, alam / bhāvanayālam ity arthaḥ Cp. kṛtam anityam acetanaṃ śārīraṃ bhāvayate sādhyati, hetur iti śeṣaḥ / śārīrasyaiva vakṣyamāṇanyāyena calanādi sidhyati / tasmāc charīrād anyo jīva ity āstikānām ātmāstītvavādinām mate yaḥ smṛtaḥ sa na bhavati /

⁴¹P. anyo jīvaḥ śārīrasya D. nānyo jīvaḥ śārīrasya D. でなければ意味をなさない。

⁴²P. jātiṣmṛtir D. jātiḥ smṛtir Cn. smṛtir iti / tathā tarkamate jaḍayor apy ātmamanasor yogād ajaḍam smṛti-yādirūpaṃ jñānaṃ jāyate tadvad atrāpi bhaviṣyati

⁴³ambubhakṣaṇam Cs. ambubhakṣaṇam vahniḥ viśeṣeṇa vadvāgner iva, taptavālukādayo vā jalam saṃharanti / (? ものには、靈魂なしに、独特の働きがある、ということか。あるいは、このような事態はありえないので、この前提になることが否定される、ということか。ということか。前者の主張を次の詩節とともに、30 詩節でパンチャシカが否定するようである。)

- (29) (そうではない。)死後の身体要素の崩壊⁴⁴、神々への懇願⁴⁵、死者における行為停止、という以上のことは(目に見えない靈魂が存在することの)認識基準である、と確定している。
- (30) しかしそもそも⁴⁶、何等かの形あるものの存在のためのこれらの理由は、[形なきものの存在の証明には]用いられない。不死なる(形なき)ものには⁴⁷死すべき(形ある)ものと⁴⁸共通なものは成立しないのである。
- (31) ある人々は、無知と行為が働く人々に再生が⁴⁹あり、(再生の)原因は、貪欲と迷妄、そして悪しき行為の⁵⁰実行である、と言った。
- (32) 彼らによれば、無知は地、行為はそこに蒔かれた種子である。渴愛(という種子を)を芽生えさせるものは(種子にかける)水である⁵¹。これが彼らにとっての再生である。
- (33) 心が、(身体から?)引き離され⁵²そして焼かれ、死を性質とする時⁵³、別の身体がその(身体?)から⁵⁴生じる。人々は、それを生き物の滅⁵⁵と言った。
- (34) その(新たに生じた存在)が、姿も⁵⁶、種姓も、学識も(?)、目的も⁵⁷(前の存在と)異なるのであれば、どうして、その中に彼(前の存在)がいることになろう。従って(iti)、(両者の)関係は、結びつかないことになろう⁵⁸。
- (35) またもしそうであれば、布施・知識・タパスの力(の獲得)によって、いかなる満足があらうか。ある人によって行なわれた行為は、すべて別の人が獲得するのであるから。

⁴⁴P. pretya bhūtātyayaś D. pretībhūte 'tyayaś Cn. pretya bhūtātyaya iti pāṭhe, mṛtvā bhūtanāśaḥ ity arthaḥ Cs. bhūtātyayaḥ bhūtasya śarīrasya pralayo bhavati

⁴⁵P. devatābhyupayācanam D. devatādyupayācanam N. tathā sītajvaranivṛtyartham mantrapratipādyā devatālokāyatike na prārthyate sā ced bhūtamayīsyāt tarhi ghaṭādivad dr̥ṣyate sūkṣmaśarīrasya lokāntarasamcāraḥsamasyāsvikāārāt /

⁴⁶P. na tv D. nanv N. evaṃ svamate sādhaḥkāny uktvā paroktān hetūn ābhāsayati nanv etad iti /

⁴⁷P. amartyasya D. amūrtasya

⁴⁸P. amartyasya D. mūrtena

⁴⁹P. punarbhavam D. punarbhave 無知と行為を dvandva に読むのは 32 偈に基づく。

⁵⁰P. doṣānām ca D. doṣānām tu

⁵¹tr̥ṣṇāsamjananam sneha N. tr̥ṣṇā snehaśrayajalarūpā この比喩は、仏教文献に散見される。以下の箇所は、室寺義仁氏、根本文雄氏のご教示による。Daśabhūmikāsūtra (Buddhist Sanskrit Texts No.7, Darbhanga, 1967) p.31.20-21; J.D.Schoening, *The Śālistamba Sūtra and its Indian Commentaries*, vols.II, p.424, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 35.2, Wien 1995.; Abhidharmakośaṅkā Upāyikā, Peking Tu.179b5-180a6; Aṅguttara Nikāya PTS edition vol.1, p.223; 雜阿含 大正第2卷 p.8c-9a.

⁵²P. vyūḍhe D. gūḍhe

⁵³P. citte maraṇadharmīni D. bhinne maraṇadharmīni D. に従えば、「(身体の要素が)引き離され、焼かれ、分離して、死を性質とする時」という意味になろうか。citta のないこの読みの方が理解しやすい。

⁵⁴P. 'nyāḥ D. 'smāḥ P. では「別の身体が別の(身体?)から生じる」ということとなるが、いずれにせよ「死んだ身体から別の身体が生じる」という意味であろう。

⁵⁵sattvasamkṣayam Cn. sattvasamkṣayaṃ mokṣam / sattvasya dhīdhātoḥ samkṣayaḥ samyagaisvaryam nirviṣaya-pravāhitvaṃ kaivalyam ity āhuḥ

⁵⁶P. sa rūpataś D. svarūpataś

⁵⁷arthataḥ Cv. arthaḥ sukhabhoktṛvatadabhāvākhyaprayojanāc ca

⁵⁸P. eva sambandhaḥ syād asaṃhitāḥ D. evaṃ sarvaṃ vā syād asaṃhitāḥ Cs. asaṃhitāḥ asaṃnikṣṭāḥ

- (36) その時には (すなわち他人の行為の結果をを得る時には)、ある人は、他の粗野な人々によって⁵⁹、(再生したとき) この世で苦しめられることになる。樂をする人にせよ、苦しむ人にせよ、それには (asya 再生には?)、決まった規則が見られるのである⁶⁰。
- (37) 同様に (tathā 再生するのが別の身体であれば)、棍棒で身体を殺したとしても、それは再生することになる。そして、それは別の知識をもつので⁶¹、再生した者はそのことを (殺されたことを) 認識することはないのである。
- (38) 人々は、季節、一年、太陰日、寒さと熱さ、快と不快とが、(交互に) 過ぎ去るのを見る。生き物の滅も⁶²それと同様である⁶³。
- (39) 老齢によって困まれ、また破壊者たる死によって困まれたものは、老いて徐々に力弱り、家 (が滅するが) ごとくに、滅するのである。
- (40) 感官、心、体風、血、肉、そして骨は、順番に滅し、その元素 (dhātu) へと至るのである⁶⁴。
- (41) 世事の規定⁶⁵、そして布施とダルマの果報の獲得 (?)⁶⁶、そのためのヴェーダの言葉と世間の慣習、
- (42) というように、正しい心には (行為のための) たくさんの理由が⁶⁷ある。(従って) こうでもあり、ああでもありと、何も理解できないのである。
- (43) このように考えつつ、あちこち走りまわる者の統覚 (buddhi) は、どこに落ち着くにしても⁶⁸、そこで木 (が朽ちる) ように⁶⁹老いるのである。
- (44) このように利益と不利益によって苦しめられたすべての人々は、もろもろの聖典によって⁷⁰、引かれて行くのである。象が象使い達によって (引かれて行くように)。
- (45) これら多くの価値なき (?) ⁷¹人々は、最終的な安樂をもたらす利益に執着して いる。より大きな苦に至って、望みを捨てて⁷²、死に支配されるのである。

⁵⁹ anyair prakṛtaiḥ Deussen: infolge des von andern früher Begangenen (*prakṛtaiḥ mit C.*)

⁶⁰ P. dṛśyo 'py asya vinirṇayaḥ D. dṛśyādṛśyavinirṇayaḥ Cn. dṛśyaḥ spaṣṭaḥ

⁶¹ pṛthagjñānaṃ yad anyac ca Cv. (reading yad anyasya) anyasya dehād anyasya pretayoniṃ prāptasya jñānaṃ mām ayaṃ hiṃsitavān iti jñānaṃ pṛthag asti tena kāraṇena /

⁶² sattvasaṃkṣayaḥ Cv. sattvasaṃkṣayaḥ jīvasaṃkṣayaḥ

⁶³ tādṛśaḥ Cv. ṛtutvādyavasthā gacchati, kālas tu na naśyati, tathā jīva iti bhāvaḥ /

⁶⁴ svaṃ dhātum upayānti Cs. svaṃ dhātum upayānti svasvakāraṇe liyanta ity arthaḥ /

⁶⁵ P. lokayātrāvidhānaṃ D. lokayātrāvighātaś

⁶⁶ P. dānadharmaphalāgamaḥ D. -phalāgame

⁶⁷ hetavaḥ Cs. hetavaḥ karmānuṣṭhānakāraṇāni śrutismṛtisadācararūpāni /

⁶⁸ nivīśate Cs. nivīśate sthīrā bhavati / na viśate iti vā pāṭhaḥ /

⁶⁹ vṛkṣavat Cs. vṛkṣavat vātāndolitavṛkṣavat

⁷⁰ āgamaḥ Cs. āgamaḥ kāmyakarmavidhibhiḥ

⁷¹ P. viśulkāḥ D. viśuṣkāḥ viśulkāḥの語義不明。

⁷² hitvāmiṣaṃ Ganguli: forcibly torn from their coveted meat

- (46) 長く生きることのない滅する者にとって、親戚や友人を得ること⁷³が何になるのか。一切を捨てて進む者は、瞬時に去って、戻ることはない。
- (47) 常に身体を護っているのは地・空・水・火・風であると、このように観察した後、いかなる歓喜が生じようか。この滅する者(身体)には、安息所はないのである。
- (48) この欺瞞なく偽りなき⁷⁴、最高の至福であり、自己を観察する言葉を吟味した後、驚いた王は、再び質問するために進み出た。

[2 1 2 章] (= 2 1 9 章、7930-7983)

ビーシュマは言った。

- (1) ジャナカ族のジャナデーヴァは、すぐれた聖仙によって知らしめられたが、しかし、もう一度、死後における⁷⁵(靈魂の)有無について質問した。
- (2) 「尊者よ、死後⁷⁶、ある人に(のみ)意識があるとするならば、(他の人々においては)知識あるいは無知は、いかなる相違があるのであろうか⁷⁷。
- (3) 一切が断滅の状態にあるのであれば、次のことを示すべし、再生族のすぐれた者よ。正気の者と酩酊した者とは、いかなる相違があるのであろうか。
- (4) 存在する者においては⁷⁸解体があり、滅する者において結合があるのであれば、何のために、聖訓によって⁷⁹行為すべきなのか。この点についての正しい決定は何か。」
- (5) 闇によって覆われ、病のごとく⁸⁰惑乱せし者を静めつつ、再び詩人パンチャシカは語った。
- (6) ここでは断滅の状態は(ucchedaniṣṭhā)なく、存在の状態も(bhāvanīṣṭhā)ない。なぜならば、この身体と感官と心の集合体は、行為においては(相互に)依存するとしても、互いに別なものとして存在するからである。
- (7) (身体を構成する)元素は⁸¹五種に別れる。(それらは)虚空、風、火、水、地である。これらは、自性によって⁸²(集合して)存在し、自性に従って分離するのである。
(cf.[Bedekar 1961], pp.14-15. Johnston, pp.67-68.)

⁷³P. mitraparigrahaś D. bhinnaparigrahaś

⁷⁴anupadhi vākyaṃ acchalaṃ Cn. anupadhi, bhramavipralambhādirahitaṃ vedamūlakatvāt / acchalaṃ vaidikakar-makāṇḍavanā na māyāmūlakam // Cs. anupadhi / upādhir upālambhaḥ, tadrāhitam

⁷⁵sāmparāyāye Ca.,Cs.: sāmparāyē tattvajñānapratibandhini saṃśāyē Cv. sāmparāyē mokṣaṣaṣāyāye / mokṣa-sādhanāya mokṣabādhānāya cety arthaḥ N. sāmparāyē maraṇe

⁷⁶P. yad idam pretya D. yadi na pretya

⁷⁷P., D. cd: evaṃ sati kim ajñānaṃ jñānaṃ vā kim kariṣyati Ca. etad yadi kasyacid api bhavati tadā śeṣānām jñānaṃ vā kim kariṣyati ab 句は D. の方が質問の趣旨はわかりやすい。すなわち、「もし死後だれにも意識がないのであれば」。cf. Brh Upa 2.4.12 (na pretya saṃjñāsty are brāvi / iti hovāca yājñavalkyaḥ /); [Hopkins Great Epic], p.149,fn.1.

⁷⁸bhūteṣu N. bhūteṣu divyāṅganādiṣu

⁷⁹P. kalpena D. kalpyeta Cpp. paṭunā kalpena śāstreṇa

⁸⁰iva cāturam Cp. āturam uktipratyuktiśūnyam Cs. kartavyatāmūḍham

⁸¹dhātavaḥ Cn. dhīyate niliyate kāyam eṣv iti dhātava upādānāni Cp. dhātavaḥ sarveṣāṃ kāryānām vidhārakāḥ

⁸²svabhāvena Cn. svabhāvena iti sāṃkhyamatābhīprāyena, teṣāṃ īśvarakālayor abhāvāt jīvānām codasīnatvāt adṛṣṭasya ca kāryatvena kāraṇāpravartakatvāt svabhāvata eva guṇānām pravṛttir iti matam Cp. svasmād ātmāno bhāva udbhavo yeṣāṃ te svabhāvāḥ karmāṇi / karmabhyaḥ / svabhāvataḥ avidyāyāḥ, na svakarmavaśena Cs. svabhāvena svakarmanā

- (8) 虚空、風、熱⁸³、脂性、そして地からなるものこの五種の集合が身体であって、(身体は)単一ではない⁸⁴。知識と体熱と体風の三種が行為の要件 (karmasaṃgraha) である⁸⁵。
- (9) 感官、感官の対象、自性⁸⁶、意識 (cetanā)⁸⁷、心 (manas)、呼気、吸気、変異物、そして元素⁸⁸がここから (atra 行為の原因?) 生じるのである。
- (10) 耳、皮膚、舌、眼、そして鼻が五種の感官であり、(これらは)心に従う⁸⁹要素 (guṇa) である。
- (11) そこ (感官) では、認識 (vijñāna) と結びついた感受 (vedanā) が常に三種存在する。その感受において、人は「苦である、楽である、苦でもなく楽でもない」と言うのである。
- (12) 音声、触感、色、味、香り、そして(それらが属する)形あるもの⁹⁰、これらの五種、(あるいは)六種の要素は⁹¹、死ぬまでの間に、知識を完成させるためのものである。
- (13) それら (耳など) において行為を発し (?)⁹²、あらゆる真実の意味の決定をすること、それを⁹³人々は、最高の種子にして⁹⁴、統覚 (buddhi) という、偉大な不変なるもの⁹⁵であると言った。
- (14) この性質の集合をアートマンと見る者は、誤った見方のために (asamyagdarśanair)、際限のない苦を静めることはできない。
- (15) アートマンは存在しない、という見解によっては、「私」は存在せず、「私のもの」も存在しない。(アートマンが存在しなければ) 何に依存して途切れることなく⁹⁶苦の連続は存在することがあろうか。

⁸³ uṣmā Ca. uṣmā tejaḥ, bhuktānnapākādīnā śarīrapālakāḥ

⁸⁴ cf. MBh. XII. 267. 11 *tasya bhūmimayo dehaḥ*

⁸⁵ P. karmasaṃgrahaḥ D. kāryasaṃgrahaḥ Ca. tasya karmaṇām gamanāgamanādīnām saṃgrāhakatvāt karmasaṃgrahākhyā [Hopkins Great Epic]: The aggregate causing activity (p.149.31) cf. BhG.18.18

⁸⁶ svabhāvaś Ca. svabhāvaś ca svasmād bhāvo na tv anyasmād itī svabhāvo nitya ātmā

⁸⁷ cetanā Cs. cetanā niścayātmikā buddhiḥ

⁸⁸ dhātavaḥ Cp. dhātavaḥ śarīradharakā ity arthaḥ / yad vā 'māmsāśrīkṛpūyaviṇmūtrasnāyuvīṇmūtrasaṃjñakāḥ' sapta

⁸⁹ P. cittapūrvaṅgamā guṇāḥ D. cittapūrvaṅgatā guṇāḥ Ca. cittaṃ pūrvaṃ gamayati prerayati etān itī / guṇa-bhūtāḥ ātmārthatvād ete guṇāḥ Cp. cittaṃ pūrvaṃ gamayante, cittapūrvaṃ gacchanti vā / manonugā ity arthaḥ / ātmādhīnatvād guṇāḥ cf. Mahāvīyutpattī 148-150, 799, 6270; Saṃyutta Nikāya (PTS edition) vol.5, p.1.13 et passim

⁹⁰ P. mūrtya aṭha D. mūrtaḥ Cn. mūrtaḥ rūpāśrayadravyāṇi, vāyvakāśayor amūrtatvaśruter bāhyendriyāgrāhyatvāt / pañca śabdādīyāḥ mūrtyubhiḥ saha ṣaḍguṇāḥ viśayāḥ

⁹¹ pañca ṣaḍ guṇā Deussen: als fünf oder [mit einschulss der Funktion des Manas] als sechs Qualitäten Cv. (reading ṣaḍguṇājñānasiddhaye) manasā saha ṣaṇṇām jñānendriyāṇām guṇabhūtaṃ yaj jñānaṃ tasya siddhaye

⁹² P. karmanisargaś D. karmavisargaś Ca. (reading karmavisargaś ca) visargo viśiṣṭā puṇyārthā sṛṣṭiḥ

⁹³ tam N. taṃ tattvaniścayam Cn. śukraṃ

⁹⁴ paramaṃ śukraṃ Cn. śukraṃ mokṣabījam

⁹⁵ avyayaṃ Ca. avyayatvaṃ avyayaśātmano bodhahetutvāt

⁹⁶ prasaktā Ca. prasaktā avicchedyā Cn. prasaktā pratīyamānā

- (16) この点について、「サムヤックマナス」(「正思」)という⁹⁷名の、最高の棄却の聖典がある。汝の解脱のためにこれから語ることを聞くべし。
- (17) 棄却とはこれまでに述べられたあらゆる行為の(棄却)である。常に誤謬に導かれる者にとっては、煩惱(kleśa)が苦を運ぶものであると考えられる。
- (18) ものの棄却に関して祭式があり、享受の棄却に関して誓約(vrata)があり、安楽の棄却に関して苦行(tapas)への専心があり、一切の棄却において完成が⁹⁸生じるのである。
- (19) その「一切の棄却」の唯一の道(mārga)が示された。苦の消滅のためには他(の道)は悪しき道となろう。
- (20) 心にあり(? cetasi) マナスを六番目とする五種の知覚器官を述べたので、次にマナスを六番目とする⁹⁹五種の行為器官を述べよう。
- (21) 手は行為器官であると知るべし。そして、足は歩行器官である。(男の)性器は生殖と歓喜の、肛門は排泄器官である¹⁰⁰。
- (22) 発声器官はしかし、五種(の器官)に伴われた、特別な音声のための場所であると¹⁰¹知られている。このような十一種(の感官)を心(manasa)は統覚によって解き放つべし(?)¹⁰²。
- (23) 両耳と音声と心は、三つの聴覚要件である(trayaḥ śravaṇasamgrāhe)。触感においても同様であり、色においても同様であり、味と香りにおいても同様(三者によって把握するの)である。
- (24) このように、これらの十五種の構成要素(guṇa)は、その知覚のために¹⁰³三通りに(働くのである)。それによって、三種の状態¹⁰⁴が交互に生じるのである。
- (25) それらはサットヴァ的、ラジャス的、タマス的という三種である。そこにおいて、三種の感受が¹⁰⁵、あらゆるものを手段として(? sarvasādhanā 「あらゆるものから」か)、生じるのである。(cf.MBh.XII.187.28)

⁹⁷P. tatra samyañmano D. atra samyaḡvadho Cn. hantur guṇanārthe jyotiḥśāstre prasiddhaḥ/ samyaḡvadho nāma sām̐khyasāstram/ samyañmano iti pāṭhe samyak sam̐dehanirmuktaṃ mano yeneti /

⁹⁸samāpanā Ca. samāpanā śarīrāpagamāt saṃsārasamāptiḥ Cs. samāpanā saṃsāranivṛttiḥ Cv. samāpanā samyaḡāpanā bhagavatprāptir bhavati

⁹⁹P. manaḥsaḥḥāni D. balaḥsaḥḥāni Ca. balaḥsaḥḥāni balamūlatvāt karmaṇaḥ saḥḥaṃ karmendriyair avasāyaṃ balaṃ apekṣaṇīyam, mana iva buddhīndriyaiḥ

¹⁰⁰Bedekar は、ここまでに挙げられた原理を合計して、「パンチャシカは 23 原理を説いている」としているが、同意しがたい。([Bedekar 1957-2] p.237)

¹⁰¹P. śabdaviśēsarthaṃ gatim D. -rtham iti

¹⁰²P. buddhyā tv avasṛjen manaḥ D. buddhyā 'śu visṛjen manaḥ

¹⁰³tadupalabdhye Ca. yady api mana ekam eva sarvatra tathāpi upādhibhedād bhinnam iti bhāvah

¹⁰⁴P. yena yas trividho D. yenāyam trividho Cs. trividho bhāvah ahaṃkārah

¹⁰⁵trividhā vedanā Ca. vedanā vedyamānaḥ prītyādih

- (26) 享楽¹⁰⁶、喜悦、歓喜¹⁰⁷、安楽、静かな心が、どこからかあるいはどこからともなく生じるが、それが心のサットヴァ的な性質である。(cf.MBh.XII.187.33, 239.23)
- (27) 不満、苦痛、悲しみ、食欲、そして苛立ち、これらは、原因がある場合とない場合とがあるが、ラジャスの目印である。(cf.MBh.XII.187.34)
- (28) 無分別、迷妄、酩酊、眠気が何等かの理由で生じるが、それら種々のものはタマスの性質である。(cf.MBh.XII.187.35)
- (29) その中で、身体あるいは心において、喜悦と結びついたものが生じたならば、それはサットヴァ的な状態が働いている、とみなすべきである。(cf.MBh.XII.187.30, Manu 12.27, Bombay.XII.248[47].20)
- (30) 苦痛と結びつき、自分の不満を作るもの、それはラジャスが活動していると、考えるべし。(cf.MBh.XII.187.31, Manu 12.28, Bombay.XII.248[47].21)
- (31) あるいは、迷妄と結びついた、判然とせず判別できないものが身体か心にあるならば、それはタマスであると見なすべし。(cf.MBh.XII.187.32, Manu 12.29, Bombay.XII.248[47].22)
- (32) それは耳に依存して存在し¹⁰⁸、音声は耳に依存している。両者は¹⁰⁹、起きている者の場合でも、そうでない場合でも¹¹⁰、音声の認識においては存在しない(対象ではない)のである。
- (33) 皮膚、眼、舌、五番目として鼻は、触感、色、味、香りにおいても同様である。それらは意識(cetas)であり、そして意識はマナスである(?)¹¹¹。
- (34) 十の感官においては、自分の行為と同時に(心は)存在する。心(citta)を十一番目と知るべし。統覚は十二番目となろう。
- (35) それらが同時に存在しないならば¹¹²、タマスのものが¹¹³断滅することはない¹¹⁴。世間の慣習では(感官と心は)同時に存在すると認められている¹¹⁵。

¹⁰⁶praharṣaḥ Ca. praharṣaḥ romāñicādīḥ

¹⁰⁷ānandaḥ Ca. ānandaḥ anyaviśayavyāvartakaṃ sukham

¹⁰⁸P. tad dhi śrotṛāśrayaṃ bhūtaṃ D. śrotraṃ vyomāśritaṃ bhūtaṃ D. の読み(「耳は空間に依存して存在している」の方がわかりやすい。P. では tad が何を指すのかわからない。第 23 詩節 ab 句の citta か。

¹⁰⁹nobhayaṃ Ca. nobhayaṃ śabdaḥ śrotraṃ ca ... samartham Cs. nobhayaṃ śrotṛākāśadvayam api

¹¹⁰vijñānasyetarasya vā Cv. suṣuptidaśāyām ajñānasya jāgradavasthāyām vijñānasyeti bhāvaḥ N. ubhayaṃ vyomaśrotre nijñānasya viśayau na / ... itarasya vijñānād anyasyājñānasya vā viśayo śrotṛākāśau na bhavataḥ śabdasya taduhayānanyatvāt / Deussen: mag dabei das Bewusstsein [manas] tätig sein oder das Gegenteil stattfinden.

¹¹¹tāni ceto manaś ca tat Cv. yac cetas tad eva manaḥ この句の意味不明

¹¹²ayugapadbhāve Ca. ayugapadbhāve 'melake eṣām śarīrādyabhāve ucchedo mokṣaḥ

¹¹³P. tāmasaḥ D. tāmasa

¹¹⁴nāsti tāmasaḥ Ca. tāmaso nāsti / upalakṣaṇatayā rājaso 'pi nāsti / sāttvika eva rāgādyapagamāt sambhavatīti bhāvaḥ

¹¹⁵āsthito Cs. āsthita iti / ayugapadbhāve iti padam / teṣām ayugapadbhāve āsthitaḥ pramūḍhaḥ āropitaḥ sa ucchedaḥ laukikaḥ lokaprasiddho vyavahāraḥ

- (36) 三種のグナに伴われた者は、感官を解放しても、かつて知覚したものが至るのを見て(?)¹¹⁶、(夢の中で、対象について?) 考えつつ、(対象に?) 従うことはない¹¹⁷。
- (37) タマスに損なわれ、すばやく動く¹¹⁸恒常でない心が、(夢の中で) ある時、停止した時¹¹⁹、それを人々はタマスの安楽(睡眠)と言う。
- (38) 何にせよ(夢の)出現に結びついたものを(? *āgamasamyuktam*)、完全に静めることはない¹²⁰場合は、虚偽であるタマスを¹²¹、明らかであるかのごとく¹²²受け取るのである。
- (39) このように、この(夢の)要素(*guṇa*)は自分の行為に依存するものである¹²³と説明された。要素は、ある人々にとっては、何等かの仕方、正しく働くか、あるいはある人々にとっては、働かないのである。
- (40) このように、大我(*adhyaṭma*)を考察する人々は、この集合を¹²⁴田と呼んだ。これに対し、マナスの中に存在している状態は¹²⁵、知田者と言われる。
- (41) このような時、自性に従い、原因に基づいて存在しているあらゆる生き物に、断滅があるか¹²⁶、またどうして永遠に存在できようか¹²⁷。
- (42) 川は、海に入ると、形と名前を捨て、自分であることに限定しない¹²⁸。(cf. *Mund.Upa.3.2.8*) 生き物の滅(*sattvasamkṣaya*)も同様である。
- (43) このような時、どうして意識は、死後再生するであろうか。靈魂は混ざりあい、(より大きなものの?) 中で捉えられている時に¹²⁹。

¹¹⁶P. *indriyāny avasrjyāpi dṛṣṭvā pūrvaṃ śrūtāgamam* D. *indriyāny api sūksmāni dṛṣṭvā pūrvasrūtāgamāt*

¹¹⁷*cintayan nānuparyeti* Cn. *cintayan nānuparyeti / nā puruṣaḥ svapnadarsī tribhir guṇaiḥ sattvādibhir yuktaḥ anuparyeti jāgradavasthām anusamcarati svapne / kāye (for kāle in 37c) ity uttarād apakṣyate, sve śārīre* Cs. *anuparyeti svakarmaphalāny anu satataṃ paryāyeṇa gacchati*

¹¹⁸P. *saṃcāram* D. *saṃhāram*

¹¹⁹P. *kāle* D. *kāye* Cs. *kāye uparataṃ kāyam evāṃśatvena nirṇītaṃ karoti / tamopahatatvāt svarūpam ātmano na jānānti arthaḥ*

¹²⁰P. *na kṛtsnam upaśāmyati* D. *na kṛcchram anupaśyati*

¹²¹*anṛtam* Cv. (*reading āvṛtam*) *āvṛtam avyaktam iva andhakāram iva tamaḥ tamoguṇau upādatte jīvaḥ*

¹²²*vyaktam iva* Cp. *vyaktam kāryaśārīram; Cv. āvṛtam avyaktam iva andhakāram iva tamaḥ tamoguṇam upādatte jīvaḥ*

¹²³*evam eṣa prasamkhyātaḥ svakarmapratyayī guṇaḥ* Ca. *eṣa tamolakṣaṇo guṇaḥ svakarmapratyayī, svakarma vyāpāraṃ prati ayī gamanaśīlaḥ* Cs. *svakarmapratyayī svakarmaparādhīnaḥ*

¹²⁴*samāhāram* Ca. *samāhāram, bhūtādisamudāyam*

¹²⁵*sthitō manasi yo bhāvaḥ* Ca. *yo bhāvaḥ abhāvavyāvṛttaḥ ātmākhyā / etena cārīkamatam apāstam / nātmano 'bhāvaḥ, mānasapratyakṣasyoktatvāt / nāpi jñānanivṛtīrūpo yathā buddhamatam* Cp. *bhāvayati pravartayati indriyāni teṣu teṣu viṣayेषु iti bhāvaḥ svaparaprakāśa ātmā* Cv. *bhāvayati sarvaṃ dehavāpāram iti bhāvaḥ sāksī*

¹²⁶*ka ucchedaḥ* Cp. *acinmilane tattvajñānam antareṇa ka ucchedaḥ*

¹²⁷*śāsvato vā kathaṃ bhavet* Cv. *jīvaḥ śāsvataḥ śāsvadekaprakāraḥ nārāyaṇaḥ kathaṃ bhavet*

¹²⁸P. *na ca svatām niyacchanti* D. *nadāś ca tāni yacchanti* Ca. *na punar brahmaiveti pratipādayitum āha— na ca svatām niyacchanti..... te hi māśarāśipraviṣṭamalīguḍīkāvādāpātatas tadrūpatayā pṛthaganaavabhāsamānā na māśatvam evāpadyante / evam ātmāno 'pi pṛthagdravyabhūtāḥ kathaṃ aikyam āśādayeyuḥ vyaktīr dehāms tyajanto 'pi*

¹²⁹P. *pratisaṃmīrite jīve gṛhyamāne ca madhyataḥ* D. *jīve ca pratisamyukte gṛhyamāṇe ca sarvataḥ* Cp. *sarvataḥ sarveṇa kartṛtvabhoktṛtvādinā*

- (44) これを解脱の認識であると知って、本気で自己を求める人は、望ましくない行為の結果によって汚れることはない。あたかも蓮の葉が水をかけられても（汚れないように）。
- (45) 誕生の原因であり¹³⁰、運命的でもある多くの堅い毘から解放されたこの者は、苦楽を離れ、解脱し、かの最高の境地に、(個人の) 徴表なく¹³¹、至るのである。ヴェーダ、認識手段、伝承、称賛によって¹³²、老死の恐怖を越えて横たわるのである。
- (46) 善を滅し、悪を離れ、これらを原因とする結果が消滅した時に、執着なき人々は、澄んだ虚空に徴表なく¹³³止まり、「大きなもの」を¹³⁴見るのである。
- (47) 例えば、(糸を) 動き回っている蜘蛛が、糸がなくなった時落ちつつ存在するように、解脱した者は、苦を滅し、石に勢いよく当たった¹³⁵土塊のように消滅するのである。
- (48) 鹿が古い角を捨て、あるいは蛇が皮を捨てて、捨てた後顧みることなく進む様に、同様に、解脱した者は苦を捨て去るのである。
- (49) 例えば、鳥が水に落ちた木を捨てて、(そこに) 留まることなく飛び去るように、同様に、解脱した者は、苦楽を捨てて、徴表なく、最高の境地に至るのである。
- (50) また、町が火で燃えているのを見た時に、ミティラの王は歌った。「ここでは、私の糸がらさえも焼かれない」¹³⁶。実に、ミティラの王は、自らこのように言ったということである。
- (51) この不死の境地を¹³⁷、ヴィデーハの王は¹³⁸、ここでパンチャシカによって語られ、確固とした意味を完全に見てとり、最高の安楽を得、悲しむことなく、(すべてを) 捨てたのである。
- (52) この解脱についての確定的な教義を語る者は、損なわれず¹³⁹、常にそのように観察し、災害を被ることなく、苦を離れ、解脱するのである。ミティラの王がカピラに¹⁴⁰近づいて解脱したように。

(1998年11月30日 受理)

¹³⁰prajānimittair Ca., Cp.: prajānimittaih ādhibhautikaih

¹³¹aliṅgaḥ Cp. tyaktaliṅgaśarīrābhīmāṇaḥ Cs. aliṅgaḥ nirupādhikaḥ Hopkins はこれを liṅgaśarīra の意味に解している。([Hopkins Great Epic] p.151.21) Bedekar は charakterless と訳しているが、対応する語を alakṣaṇa としている。([Bedekar 1957-2] p.237)

¹³²śrutipramāṇāgamamaṅgalaiś ca Ca., Cp.: maṅgalaiḥ yajñeśācyutagovindamādhavāntakeśaveśetyādi bhagavannāma kīrtinaiḥ Cn. maṅgalaṃ sādhanam śamādi Cs. maṅgalāni nigamaviśeṣāḥ

¹³³aliṅgam Cp. aliṅgam ahaṃkāramamakāraliṅgarahitam ātmānaṃ paśyati Cv. aliṅgam, liṅgadeharahitam

¹³⁴P. mahad dhy D. mahaty Ca. mahad ātmasvarūpaṃ paraṃ brahma vā / mahad dhy asaktā iti pāṭhe mahad dhīty ātmaviśeṣanam / ātmānam eva sarvaiśvāryabhājaṃ sṛṣṭipralayasamarthaṃ paśyantīti arthaḥ Cv. (reading mahaty asaktāḥ) mahati samsāre

¹³⁵P. arcchan? D. ṛcchan N. ṛcchan vegena prāpnuvan

¹³⁶P. na khalu mama tuṣo 'pi dahyate 'tra D. na khalu mama hi dahyate 'tra kiṃcit cf. MBh.XII.17.18, 171.56, B.12.276.4, Jātaka 339, Gāthā 125, Dhammapada 200, Uttarādhyayana S. 9.14

¹³⁷amṛtapadaṃ Cp. amṛtapadaṃ mokṣavācakaṃ tatprāptihetukaṃ vā

¹³⁸P. videharājaḥ D. niśamya rājā

¹³⁹P. na hīyate D. mahīpate

¹⁴⁰kapilaṃ N. kapilaṃ kapilapraśiṣyaṃ pañcaśikham